

巻頭言

文学部・文学研究科教育促進支援機構（以下、「支援機構」と記す）は、毎年、『文学部案内』と『フォーラム人文学』の編集に携わっている。『文学部案内』は、文学部からの委託により製作されており、これにかかわる人数も期間も比較的規模が大きい。それに対し、『フォーラム人文学』は、支援機構の活動記録として発行される冊子であり、『文学部案内』と比べると、様々な点で規模が小さい（ように思う）。私が会長になったばかりの今年の4月の時点では、予算状況が必ずしも芳しくないことや、時期的にどうしても編集に割くことのできる時間が短くなることから、『フォーラム人文学』の発行は電子媒体のみとし、紙媒体での発行をやめてはどうか、と考えていた。しかし、その後の9か月間、支援機構の活動を進めていく中で、過去の活動事例の参照が必要となる事態に何度か直面する中で、『フォーラム人文学』は紙媒体として発行するのが望ましいと思うようになった。一般論として、電子媒体と比べて、紙媒体での発行がいかに重要であるかについては、専門家が論じている内容を参照して頂ければと思うが、今回私は、電子媒体には無い利点を紙媒体が持っていることに、あらためて気づいた。以下に少し述べることとする。

まず、『フォーラム人文学』のバックナンバーを年代順に並べて見ると、冊子の厚みや紙質の変化から、この雑誌の扱いの変遷がある程度理解できた。電子媒体ではページ数は比較できても、厚みや紙質についての触覚的情報は無い。また、ある行事について、過去10年間の比較をしたくなった時に、テーブルの上に10冊それぞれの該当ページを開いて、同時に見比べることができた。これは、電子媒体であっても可能かもしれないが、必ずしも容易ではないように思われる。紙媒体の場合、それらを広げるスペースがあれば、簡単に実現できる。さらに、紙媒体は、こちらに用事がない時でも存在を知らせてくる。私は、『フォーラム人文学』を自分の研究室の書棚に置いているのだが、時々視界に入ってくる。そのような場合、時々手に取って中を見たりする。このことが、支援機構の活動にとってどれほど重要であるかは不明であるが、存在を知らせるといえるのは重要な機能のように思う。このようなことは、電子媒体では起こりにくい。Webサイトやハードディスク内の『フォーラム人文学』は、こちらから積極的に見に行かない限り、存在に気づかれることはないのではないか。

以上が、私が実感した紙媒体としての『フォーラム人文学』の利点である。いずれもたいしたことではないように思われるかもしれないが、支援機構の運営を担う立場を経験して初めて気づいたことである。まだそのような経験をされていない方々への参考になればと思う。

記録のための冊子として重要なことは、言うまでもなく、媒体よりも内容の正確さである。この点については、普段からの学生スタッフの皆さんの仕事ぶりを見れば心配無用と思っているが、各活動内容について、できるだけ詳しく記録することをお願いしたい。これもこの9か月の間にあらためて気づいたことであるが、記録は、後に色々な観点から参照されうるものであり、その際、記録されていないことについては、知られることがないからである。

文学部・文学研究科教育促進支援機構
2019年度 会長 佐伯大輔
(心理学コース教員)